

1 リモート学習開始の経緯

1-1 リモート学習開始のきっかけ

2020年4月、安倍政権下で発令された新型コロナウイルスによる緊急事態宣言の後、学校は休校、学習会も閉室となり、子どもたちの生活は実質、家庭内に閉じ込められた状況に陥ってしまった。アメリカをはじめとする先進国では既にインターネットを活用したリモート学習が始まっていたため、それらを手本に、中原区わくわく学習会でも4月末からリモート学習を順次開始した。

1-2 実質運用までの道のり

わくわく学習会へ通う子どもたちは、経済的に恵まれない子どもたちばかりのため、まずは各家庭にWi-Fi環境が整っているかどうかの確認、リモート学習の説明と受講を希望されるかの確認を個別に行ったところ、78%の家庭でWi-Fiが既に整備されていること、それらのほとんどの家庭でリモート学習の希望があった。

(2020年3月時点のWi-Fi環境整備率 中丸子教室67%、新城教室87%)

背景には、学校も学習会も休校という事態に、保護者も本人も学習の遅れを非常に心配していて、リモート学習という試みに対してかなり積極的に参加希望が寄せられた。

しかしながら、ほとんどの家庭にパソコンやパッドではなく、デバイスはスマートフォンであることが分かったため、スマートフォンでも無理なく、十分な学習を提供できるよう工夫を凝らす必要があった。

同時に、リモート学習を中学生は生徒とサポーター、1対1での運用を考えたため、zoomを利用してリモート学習が可能なサポーターを募り、生徒がどのサポーターにあたって同じ学習効果が得られるよう学習展開の仕方と手法の一元化を図り、サポーター研修をオンラインにて行い、研修を経たサポーターと希望生徒とのマッチングを行った。それらを経て、教材配布などの環境が整い次第「zoom学習」と称して、リモート学習をスタートさせた。(以降、zoom学習と記載)

2 wi-fi環境がない子どもたちに対して

2-1 郵便学習の実施

Wi-fi環境が家庭に整っていない子どもたちについては、郵便による通信学習を用意し、「郵便学習」と称した。(以降、zoom学習と記載)

4月の時点で、学習会で1年間使用する教材を各家庭に郵送済みだったので、郵便学習担当サポーターから、学習を行って欲しいページを指定、生徒は郵送された解答用紙に問題を解いて貰った後、投函。それをサポーターが添削して、次回指示と共に生徒へ送り返すという学習を、週に1回を目処に行った。

2-2 最大の効果があった生徒

郵便学習は、学習会再開と共に終了としたが、現在も引き続き、郵便学習を行っている生徒が1名いる。

その生徒は中1 夏休み明けから不登校が続いている中3生で、学習会も欠席続きであったが、今回、郵便学習で中1の勉強からやり直したいという本人の意向があり、中1の教材で郵便学習をスタートさせた。6月になり学校、学習会が再開した後も、郵便学習は続けたいとの希望で、そのまま郵便学習が続いている。

郵便学習を行っているうちに、本人の中で「高校へ行きたい」という気持ちが少しずつ芽生え、「通信制高校なら出来るかも！」という自信に繋がった。

サポーターのリードで、通信制高校を見学にも行き、通信制高校にはスクーリングという通学日があることを本人に伝え、その練習のため、学習会に週に1回来室したらどうかと提案。現在、郵便学習を行いながら、新城教室へ週に一度来室し、他の生徒と同様に大教室で、集中して学習できている。

3 学校・学習会休校中（2020年4月末～5月末）のzoom学習効果

2-1 zoom学習の利点

学校や学習会など、教育の場を失ってしまった子どもたちたちは、約束の日時をたがえることなく時間通りにアクセス。スマートフォン越しに久しぶりに会うサポーターの顔を見て、とても喜んでいる様子と共に、テクノロジーを屈指した試みを楽しんでいる様子も伺えた。

また、その学習効果は特筆すべきに値し、

- ・意識がスマートフォンの画面に集中するため、教室での対面学習よりも集中力が発揮、持続された。意識が他に飛ばない事による学習効果には目を見張るものがあった。
- ・他者の目がないため、分からないことを「分からない」と言いやすい環境。
- ・抱える悩みを相談しやすい環境でもあり、「ちょっといいですか？」と悩みを吐露する生徒もいた。
- ・担当サポーターが完全固定なため、同じサポーターによる継続的な学習提供はロングランで見た時に得られる利益は大きく、かつzoom学習は生徒と固定サポーターとで1対1で進められるため、教室学習（中1、2生は基本的にサポーターと生徒が1対2である）よりも個々の能力に応じた丁寧な指導が可能である。

などが挙げられる。

2-2 zoom学習の欠点

- ・子どもたちの手元が見えない点が最大の欠点である。

解いた問題の○付けをして貰った後、本人が「出来ていました」という言葉を信じるしかなく、間違えたと申告があった場合に、どこで間違えたかを見てやることができ

ず、改めて一緒に、ホワイトボード機能を用いて問題の書き直しつつ、どこで間違えたかを確認するしかない。

- ・英語のスペリングや、数学の作図など、生徒の手元が見えない zoom 学習ではカバーできない単元があることが否めない。
- ・学習会の仲間と会えないことは居場所としての機能が不十分であると言える。

4 小学生に行った集団 zoom 学習

学校が休校中の間のみ、小学生へは新城教室、中丸子教室の隔てなく、集団で一斉 zoom 学習を行った。Wi-Fi 環境のない小学生には中学生と同様、郵便学習を行った。

小学生を一斉学習にしたのは、学習効果よりも居場所を重視したためである。どの子も休まずアクセスしてくれ、宿題もきちんとこなし、仲間と一緒に学ぶことで連帯感と、良い意味で競争心が芽生えた様子だった。

小学生へは zoom 学習日の初日に、zoom の機能説明から始め、他者へのマナーなどを伝えてから学習を開始したが、学習開始直後、こちらから指示せずとも全員が自らをミュートにし、質問などがある時だけマイクをオンするなど、他者を慮る配慮を示したことに感心した。

学校再開後は小学生の zoom 学習は終了とした。子どもたちからは「続けて欲しい」との要望が寄せられたが、子どもたちの手元が見えない zoom 学習は幼い子どもたちへは不向きと判断した。

5 学校・学習会再開後（2020年6月～）の zoom 学習効果

5-1 学校・学習会再開後の概要

2020年6月には学校も学習会も再開し、感染防止策下にはあるものの、子どもたちの生活は通常に戻ったが、依然コロナウィルスの驚異は去っていないため、学習会では、zoom 学習を行っている全生徒に対して zoom 学習は継続とし、中1、中2生には、週1回の来室と週1回の zoom 学習を提供し、中3生に対しては週2回の来室と週1回の zoom 学習を提供している。

zoom 学習が行なえない子どもたちへは、全学年、従来通り週2回の来室としている。

5-2 子どもたちの変化

学校休校時は、zoom 学習に非常に協力的だった子どもたちも、学校が始まり部活も再開すると、それぞれに忙しくなり始めると、また、インターネットを用いた学習という目新しさも薄れてくると、徐々に約束の時間にアクセスして来ない子どもたちが出始め、欠かさず zoom 学習を行えている子どもたちと、休みがちな子どもたちとの二極化が起こり始めた。

5-3 二極化する子どもたち

学校再開後も肅々と週1回の来室と zoom 学習とを併用出来ている子どもたちは、対面学習とリモート学習の双方の利点を享受でき、成績向上も認められるが、一方で zoom 学習の継続が難しくなってしまう子どもたちが出てきている。

Zoom 学習の開始時期に多少のバラつきはあるが、週 1 回の zoom 学習を行った回数が 12 月末の時点で、生徒それぞれの合計回数は 8 回から 35 回と、zoom 学習を提供できた最低回数と最高回数の差が大きい。この差の原因は、zoom 学習欠席によるものである。休みがち傾向にある子どもたちは、事前に休みを連絡して来る生徒はほとんどおらず、約束の学習開始時間直前に「今日、休みます」と連絡して来る生徒は良い方で、約束の時間にアクセスして来ず、こちらから連絡を入れると「今日、休みます」と返信してくる生徒が大半である。

zoom 学習が続かない子どもたちの主な理由は、

- ・夕方時間帯に眠ってしまい約束の時間に起きられない。
- ・Wi-fi 環境は整っているものの、兄弟姉妹が多い家庭では、自宅で静かに zoom 学習に取り組めない住宅事情にある。

などが挙げられる。

緊急事態宣言中の休校時は、家族の協力も得られたようだが、緊急事態宣言解除後は家族の協力を得ることが難しい子どもたちが出始め、zoom 学習継続が困難となっている様子。

ただ、zoom 学習の継続が困難な子どもたちの、教室出席率も同様に芳しくないことを鑑みると、改めて家庭での学習への協力意識の違いが、子どもたちの学習への取組みの差として如実に現れていることが浮き彫りとなった。

zoom 学習を行う前までは、見えなかった家庭環境や、家庭内での子どもたちの様子を伺え、どこに問題があるのかがより深く理解できるようになり、それに対して、どのように寄り添って行ったら良いかは、今後のサポートへの深刻な課題として捉えている。

5-4 教室学習と zoom 学習併用の利点

「2-1 zoom 学習の利点」で述べた長所の他に、zoom 学習の欠点と考えられていた

「生徒の手元が見えない」という点を教室学習でカバーすることが可能となった。

毎回、変わらず学習を見てくれる固定サポーターと学校進度に沿った学習を zoom 学習で進め、教室では zoom 学習で行った範囲の演習を行うことで、子どもたちは学校で、zoom で、教室でと、計 3 回、同じ単元の繰り返し学習を行うことになり、学習の定着率は最大と考えられる。zoom 学習と教室学習のサポーターとの連絡を密にすることで、深く広く子どもたちひとり一人を見つめることが可能となった。

生徒自身の変化変容として、教室学習での演習に於いては、zoom 学習で習った所を演習課題としているため、一人で黙々と学習できるようになって来ている子どもたちが大半となった。「自分一人でも出来る！」という自信が、今後、家庭での自学に結びついて行くのではないかと願っている。

教室学習と zoom 学習を上手く併用出来ている子どもたちの成績の向上は、上述したことが要因となっていると考えられる。

また、教室学習と zoom 学習を休まず継続できている子どもたちのみならず、多くの人

と関わるのが苦手な、学校や学習会教室を欠席しがちな子どもたちに対して、自宅に居ながら、いつも決まったサポーターとだけ学習が進められる利点は大きく、学習の遅れをカバーすることはもちろんのこと、サポーターとの関わりの中で、家族ではない第三の大人と交わることが可能となった利点がある。

実際に、学校と学習会教室はほとんど欠席だった生徒が zoom 学習を経て、少しずつ成績が上がったことで自信が付き、学校も学習会教室へも欠席がなくなり、学習意欲が向上している生徒。

中学校に上手く馴染めず、学校を欠席傾向になってしまっているが、その自分の気持ちをサポーターへ吐露し、教室と zoom 学習には欠かさず参加出来ている生徒もいる。

5-5 教室学習と zoom 学習併用の欠点

現在の所、教室学習と zoom 学習併用による欠点はないと思われる。その理由として、zoom 学習が継続できない子どもたち、望まない子どもたちへは教室へ週 2 回通って貰っているため、欠点が回避できているようである。

6 今後の課題

コロナ禍というパンデミックの元で、苦肉の策で行ったりリモート学習ではあったが、実際に運用し、その効果を鑑みると、今後は zoom 学習と教室学習の併用が継続できる子どもたちを増やし、育んで行きたいと考える。

最大の課題は、教室に通うこと、zoom 学習にアクセスすることが習慣付かない子どもたちへのサポートにある。そういった子どもたちひとり一人に寄り添いつつ、少しずつ良い方へとサポートし続けたい。